

会長の時間 第8回 ウイルスの実態と日本式対応策

日出ロータリークラブ

会長 加賀山 茂

はじめに

これまでの会長の時間で、私は、ロータリークラブの基本的な理念について、「四つのテスト」の意味（第1回）、「ロータリーの目的」の意味（第2回）、「五大奉仕部門」（第3回）、「公平とは何か」について、タクシーの相乗りの場合の料金の公平な負担について検討させていただき（第5回）、「微笑みを微笑みで返す」とか「いただいたら、お返しする」とかという共感脳の抱える「やられたら、やり返す」というジレンマについて（第6回）、偽りの親睦と四つのテストの関係（第7回）について話しました。そして、いずれの回においても、本年度のRI会長（Holger Knaack氏）のテーマである「ロータリーは機会の扉を開く」を活用させていただき、3つの扉の色に即して、赤い扉は、「親睦（和らぎ睦み）」として、黄色の扉は、「職業倫理の向上」として、青の扉は、「次世代への奉仕活動の実践」として整理させていただきました。



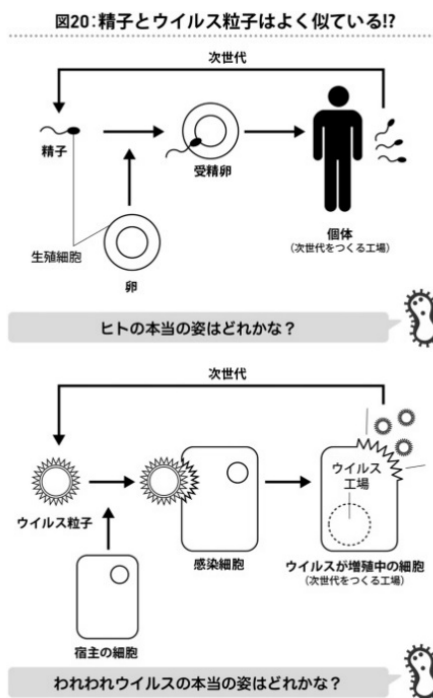
今回は、世界中に大きな被害を及ぼした新型コロナウイルス禍について、ウイルスの生物学的実体、日本式対応策の功罪、今後の社会がどうなるのかについて話したいと思います。

1. ウイルスの実体

(1) 武村政春『ヒトがいまあるのはウイルスのおかげ！－役に立つウイルス・かわいいウイルス・創造主のウイルス』さくら舎（2019/1/11）を読んで

私たちは、ウイルスは、人間を害する敵だと考えています。しかし、本書を読むと、ウイルスは、人間の誕生よりもずっと以前から地球上に存在し、しかも、電子顕微鏡でしか確認できないほど微小であり、絶滅させることができない存在であり、バクテリオファージのように無害で有益なものもあり、共存するほかない存在なのです。

右の図を見ればわかるように、精子が卵に入り込んで、精子の遺伝子を卵に結合させて増殖する様は、まさに、ウイルス粒子が宿主の中で増殖する様と類似しています。



(2) 中屋敷 均『ウイルスは生きている』講談社現代新書 (2016/3/20)を読んで

この本を読むと、ウイルス感染症は、変異したときの感染者の致死率が99%であっても、年ごとにその致死率が下がり、半分以下に落ちること、その原因はウイルスの生存戦略として、新しい宿主に適応するからだということを、例を挙げて明確に論じています。

1950年代にオーストラリアに持ち込まれた24羽のウサギが全土の70%に広がり、数十億羽に繁殖して農作物等を荒らしたために、ウサギ粘液腫ウイルスによって駆除するという作戦が実施された場合の顛末は、興味深いものです。

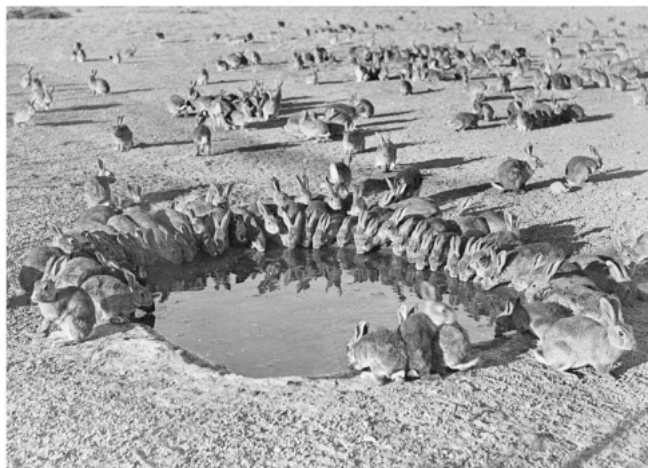


図3 オーストラリアにおけるウサギの繁殖

このウイルス作戦によるウサギの致死率が徐々に低下し始めます。当初、実験室では、99.8%、野外においても90%以上の致死率を誇っていたウサギ粘液腫ウイルスが、2年後には

は、致死率80%程度、そして6年後には20%程度へと急激にその効果を低下させていったのです。その原因は、当初は、ウサギの耐性・抵抗性に求められたのですが、実は、ウイルス側に変化が生じていたのです。

6年後のウイルスをそれを経験していないイギリスの実験室のウサギに接種してみると、6年前（1950年）の致死率99.8%を大きく下回り、致死率50%前後に低下していたことが明らかとなりました。この場合、実験に使われたウサギの遺伝的な性質は全く同じであり、ウサギが強くなったのではなく、ウイルスの毒性それ自体が低下していたというのです。

人類を恐怖のどん底に突き落としたあの「スペイン風邪」の毒性（感染者は、鼻血を出したり、咳き込んで血を吐いたり、耳から出血したりして、苦しみで七転八倒し、こども、若者、高齢者が、世界で少なく見積もっても4,000万人が死亡した）も、実はパンデミックの発生から数年で大きく低下したことが報告されています。

2. 新型コロナウイルス禍で日本はかわるだろうか

村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる－私たちの提言』岩波新書（2020/7/17）に収録されている藻谷浩介「新型コロナウイルスで変わらないもの・かわるもの」（本書258-279頁）を読んでみると、以下のような現実と向き合わざるをえなくなります。

(1) 新型コロナウイルス禍の日本における現状（本書262頁）

新型コロナウイルスに関しても、「世間で共有されるイメージ」は、一次情報からは遠く離れたところで、三次情報（意見や憶測を書いた記事とか、まとめサイト、ワイドショーな

ど）と循環参照をしながら形成されるものであって、実態を反映していない。

新型コロナによる日本の最終的な死者数の水準は、100万人あたり10人程度で収まる気配である。2019年にインフルエンザで亡くなった日本人は100万人あたり27人だったが、その3分の1程度ということだ。2019年に旧来型の肺炎（誤嚥性肺炎を除く）で命を落とした日本人と比べると70分の1未満となる。さらにいえば、新型コロナ、インフルエンザ、旧来型肺炎、そのいずれでも死者の大多数は後期高齢者であって、中年以下の年代の生命の危険は小さい。

(2) コロナで日本は変わらない（本書 264 頁）

日本人にとって避けたい事態とは、…自分の属する「世間」の中で「あいつは不注意にもコロナに感染した」「あの地域（あの会社）はうかつにも感染者を出した」と後ろ指を指され続けることである。そのため、「インフルエンザのようにコロナへの感染が当たり前になるまでは、人よりも先に罹患して世間や政府に余計な口出しをされたりしないように用心せねば」というような日本の心情が強く働き、強制ではなく自制、管理ではなく自粛が通用する事態を生んだ。

用心といっても、「手を洗う、マスクをする、室内を清潔にする、他人に触れない、近い距離での大声の会話は慎む、といった昔から変わらない所作をするだけ」のことだ。湿気が高い島国で、食中毒に代表される感染症を防ぐために生活に根付いているものばかりである。「行動変容」の逆で、習慣を変えずに振舞ったら今回でも効果的だったのだ。

今回、クラスターの発生源となった例を聞かないにもかかわらず、ホテル、旅館、通常の飲食店、特急や飛行機などはガラガラとなった。だが、他方で、通勤を続ける人は続け、喫煙者は喫煙し、一部夜の店も自粛要請に従わずに営業を続けた。オフィスや夜の街を強制的に休業させることなく、学校や幼保だけを閉鎖するというのは本末転倒である。しかしこのように「オジサンの事情」を優先し、子どもとその親にツケをまわすというのはこれまた、過去半世紀近くも少子化を放置してきたのに誰も責められない日本の、伝統に則る行動に他ならない。

(3) 変わるとすれば、「伝統回帰」の方向へ（本書 267-271 頁）

日本の伝統でありながら、戦後体制において（場合によってはそのずっと前から）ないがしろにされ、過度にそこから外れた方向に社会が誘導されてきたものとして…「通商を重視した周辺諸国との妥協と融和、女性のリーダーシップへの信頼、小さくて弱い中央政府、多極分散型国土構造、空論よりも実学の重視こそ、日本そのものの伝統」だった。

男尊女卑の風潮もゆっくりゆっくり改めつつあるが、そもそも考えれば日本の歴史で最初に史書に名を遺した権力者は女王**卑弥呼**であり、神話上で一番偉い神様は女神の**天照大神**、国づくりも**イザナギ・イザナミ**の男女共同参画によってなされたのである。

最初の小説家は**紫式部**で、国字である平仮名を生んだのも女性だ。夫婦別姓を拒む"保守"の人がいるが、源頼朝と**北条政子**が夫婦だったと教科書で習った時点で、そもそも別姓の

方が伝統であったことに気づかねばならない。

江戸時代から戦後にかけての一律の男社会化は、どう考えても伝統から逸脱しすぎであり、実際にも女性リーダーを忌避するというような考え方は、だからこそ世代が若いほど先祖返りして薄れている。

そのように考える筆者は、コロナ騒動をきっかけに、たとえば「インバウンド観光の再活性化（詳しくは272-273頁参照）、地方分権、経済機能の地方分散、女性のリーダー層への進出拡大、手に職をつける教育の復権」といった、実は"伝統回帰的"な現象が強まることもあるのではないかと、若干の期待をかけている。中央政府の機能不全が繰り返し露呈しているのも、伝統回帰と考えれば納得がいくのだ。

この論考の筆者は、このほかにも、さまざまな鋭い分析、インバウンド観光の留意点（本書271-274頁）、経済の東京一極集中の見直し（本書275-278頁）など有用な提言をしていますので、本書を手にとって読まれることをお勧めします。

3. おわりに（結論）

(1) ウイルスとは戦っても意味がない。共存の方法を考えよう

新型コロナウイルスも、やがて新型でなくなり、常在的な風邪ウイルスと化してしまうでしょう（福岡伸一「ウイルスは撲滅できない共に動的平衡に生きよ」養老孟司=ユヴァル・ノア・ハラリ=福岡伸一=ブレイディみかこ=ジャレド・ダイヤモンド=角幡唯介他（朝日新聞社編）『コロナ後の世界を語る 現代の知性たちの視線』朝日新書（2020/8/11）所収）。

宿主の側が免疫を獲得するかどうかにかかわらず、ほどほどに宿主と均衡をとるウイルスだけが適者生存して残ることになるからです。

(2) ウイルスに対しては、日本の伝統方式で対処しよう

湿気が高い島国で、食中毒に代表される感染症を防ぐために生活に根付いている日本の伝統文化、すなわち、手を洗う、風邪の症状が出たらマスクをする、靴を脱いで室内を清潔にする、他人に触れない、近い距離での大声の会話は慎む、よく働くといった昔から変わらない所作をすることが、ウイルスに対する最も自然で長続きのする対策です。

(3) 日本の伝統を見つめ直し、女性のリーダーを育てよう

日本男性の多くは、家庭では、女性のリーダーシップに従っています。ところが、社会に出ると、女性のリーダーシップを妨害している男性が多い。これに同調する女性が多いのにも驚かされます。新型コロナウイルス禍を良い機会として、紳士たるロータリアンは、家庭でそうしているのと同じように、女性のリーダーシップを尊重し、男性から女性への大政奉還を行う時期に差し掛かっていると自覚すべきでしょう。

「ロータリーは機会の扉を開く」の意味を「ロータリーは、女性のリーダーシップの扉を開く」という意味に解釈すべきだと、私は考えています。